



TITLE:

# セルフヘルプ・グループにおける 「対話」の研究(Abstract\_要旨)

AUTHOR(S):

横山, 泰三

---

CITATION:

横山, 泰三. セルフヘルプ・グループにおける「対話」の研究. 京都大学, 2018, 博士(総合学術)

ISSUE DATE:

2018-03-26

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k21230>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開; 許諾条件により要約は2018-08-01に公開; 許諾条件により要旨は2018-06-01に公開

京都大学	博士（総合学術）	氏名	横山 泰三
論文題目	セルフヘルプ・グループにおける対話の研究 Dialogue in Self-Help Group		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文は序文及び全四編（序章、本論全 10 章、および終章）からなる。これまで「セルフヘルプ・グループ」（Self-Help Group）については、主に開発（経済）学や、社会福祉学ないし社会学の領域で、またそれぞれ発展途上国と先進国、あるいはアジアとヨーロッパ・アメリカといった異なる文化をもつ地域において個別に研究がなされてきた。しかし、これら、さまざまな学問やさまざまな地域でなされた研究の成果を比較したり、統合したりする試みはほとんどなされてこなかった。つまり、その研究成果が細分化され、相互に活用されるということがなされてこなかった。本論文はそうした研究の細分化を克服するために、総合生存学がめざす俯瞰的・総合的な見地からこのセルフヘルプ・グループの問題を取り上げようとしたものである。</p> <p>そのために本論文では、開発学や開発経済学、社会福祉学、社会学などの領域において論じられてきた参加型開発やコミュニティー・オーガニゼーション、セルフヘルプ・グループなどに関する主要な言説を歴史的に辿り、あわせてそれらに関して批判的な検討を行った。また、社会の一体性が強調される日本におけるセルフヘルプ・グループの特徴を明らかにした岡知史の「自助」理論や、参加型開発の理論的淵源とされるパウロ・フレイレ（Paulo Freire）の教育学などに関する理論的な考察を行った。</p> <p>そのような理論的考察を踏まえて本論文では、論者が総合生存学館の四年目の国際実践教育（海外武者修行）において、一年間カンボジアに滞在し、実地にセルフヘルプ・グループに関する調査研究を行って、個人／セルフヘルプ・グループ／社会の動的な関わりについて分析を行った成果についても論じた。また五年目のプロジェクトベースリサーチ（PBR）において、コミュニティー・メンタルヘルスの分野で活動するセルフヘルプ・グループ、およびその関連機関の国際比較調査（アメリカ・日本・ベルギー・スリランカ・カンボジア）を実施した成果や、それを踏まえて、カンボジアのパナサストラ大学において、セルフヘルプ・グループの関係者、カンボジア国内外の研究者などを招き、各種のセルフヘルプ・グループに共通の課題、その解決方法、必要な資源をめぐって行った議論の成果についても論じた。</p> <p>そのような理論分析や実地調査を通して、論者は、セルフヘルプ・グループが周りの人間からさまざまなものの見方や考え方を受けとり、それをめぐって議論し、自己自身の考え方を深め、外部社会へと参加していくための場所となっていることを明らかにするとともに、そこで「対話」が決定的な役割を果たしていることに注目した。さらにその「対話」が三つの形をもっていることを明らかにした。一つは情緒的な一体感を醸成する対話であり、次に、問題が何か、それを解決するためには何が必要かをめぐって理論的になされる対話であり、最後に、共同学習や共同の研究を通して、外部社会に参加し、そこで積極的に発言していくための論理を身につけていくために行われる対話である。</p> <p>これらの考察を踏まえて、本論文では最後に、今後のセルフヘルプ・グループの活動や研究のめざすべき方向についても考察を行った。セルフヘルプ・グループが抱える問題の解決の方向を探るためには、グループに参加する人びとの主体性の確立、および自己形成・人格形成が重要なこと、また異なった文化圏で成立したセルフヘルプ・グループの実践や体験を知り、対話すること、そのための国際的なネットワーク作りが重要なことを論じた。</p>			

(論文審査の結果の要旨)

論文審査の結果、本論文の意義を以下の諸点に認めた。

まず、総合生存学とは何かをめぐって考察し、その方法を生かしながら、「自助」の問題、セルフヘルプ・グループの活動について考察した点である。これまでセルフヘルプ・グループの問題については、個々の学問領域において、また発展途上国や先進国において個別に研究がなされ、その研究の成果を比較したり、統合したりする試みが十分になされてこなかった。本論文はそうした研究の細分化を克服するために、総合生存学がめざす俯瞰的・総合的な見地からこのセルフヘルプ・グループの問題に迫ろうとしたものであり、その点で評価される。

次に本論文において論者は、一方においてセルフヘルプ・グループの活動や意義、あるいは問題点をめぐる既存の理論的研究を十分に踏まえるとともに、他方において、思修館プログラム四年目の国際実践教育（海外武者修行）や五年目のプロジェクトベースリサーチにおいて実施した調査や分析の結果をうまく活用している。これらの理論分析や実地調査から、論者は、セルフヘルプ・グループが周りの人間からさまざまなものの見方や考え方を受けとり、それをめぐって議論し、自己自身の考え方を深め、外部社会への参加していくための場所となっていることを明らかにしている。さらにそこで「対話」が決定的な役割を果たしていることに注目した点も本論文の大きな業績である。セルフヘルプ・グループにおける「対話」は、グループ内の一体感を醸成するという点でも、また問題の解決を図るためには何が必要かを理論的に考察する点でも、さらに外部社会に参加し、そこで積極的に発言していくための論理を身につけていく点でも大きな役割を果たしている。

このような考察を踏まえて、今後のセルフヘルプ・グループの活動や研究のめざすべき方向について考察を行っている点も高く評価される。セルフヘルプ・グループが抱える問題の解決の方向を探るためには、問題を共有する人々の自発的で持続的な「対話」が重要であること、それによってこそグループに参加する人びとの主体性が生まれることを論者は論じている。セルフヘルプ・グループは社会教育という観点でも重要な役割を担うるのである。それぞれの文化に立脚したセルフヘルプ・グループにおいては、異なった文化圏で成立した他のグループの実践や体験を知り、対話することが、その発展を考える上で重要な意味をもつ。それはまた、セルフヘルプ・グループに関する研究を発展させることにも、さらにはセルフヘルプ・グループの重要性を行政の側に伝え、政策に反映させることにもつながる。その意味で、今後、セルフヘルプ・グループの国際的なネットワーク作りが重要な課題になることを主張したことも、この論文の大きな意義である。

もちろん本論文にも、求められるべき点がないわけではない。セルフヘルプ・グループにおける情緒的一体感の問題に触れながら、感情が果たす役割について十分考察が加えられていない点や、「共創知」という興味深い概念が示されながら、それが十分に展開されていない点などである。しかしこれらの点は、申請者の今後の研究によって補われていくものであり、本論文の価値を大きく損なうものではない。

以上により、本論文は博士（総合学術）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成 30 年 1 月 29 日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。

なお、本論文は京都大学学位規程第 14 条第 2 項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日：平成 30 年 6 月 1 日以降